

審査の結果の要旨

氏名 金 明鎬

集合住宅団地に暮らす個々の高齢者の居場所の多様性と成立要件に関する研究

本論文は、集合住宅団地に暮らす個々の高齢者の居場所の多様性とその成立要件についての知見を得ることを試みるものであり、なるべく多くの高齢者が自宅から出て社会とつながりを持つためには、多様な居場所のある居住環境が必要であるという仮説を前提としている。

日本は、近年、高齢化の進行とともに、高齢者の孤独死、特に、物理的に孤立しやすい集合住宅団地での孤独死が社会問題として取り上げられ、対策として高齢者の居場所づくりに力が入られていることが背景となっている。

本論文は全6章で構成される。

第1章では、本論文の背景として孤独死の問題、研究の目的、既往研究、本研究の位置づけ、論文の構成を示した。

第2章では、予備調査と調査概要、方法を示した。

本論文は、集合住宅団地（以下、団地とする）に暮らす60歳以上の居住者を調査対象者とし、2011年6月から11月まで行われた予備調査（観察調査）から、草加松原団地と百草団地を調査対象地に選定し、2012年6月から8月まで本調査を実施した。両団地は、2,000戸以上の戸数であり、団地内の高齢者率は日本全体の高齢者比率23.3%以上であって、団地内で高齢者の居場所づくりに関する活動が活発に行われている。草加松原団地は、ニュータウン・大規模住宅団地の開発の初期に建てられた団地であり、百草団地は、草加松原団地より7年後に建てられ、初期の団地に比べ、居住者のプライバシーや環境の調和を大事に考え、住棟の配置などの新しい試みを図った団地である。

第3章では各団地における屋内・外空間で人々を観察し、その中で、高齢者がよく滞在している場所、そこでの高齢者の滞在様子を把握した。高齢者の滞在がよくみられた場所は、団地の公園や商店街周辺であった。屋外空間では男性高齢者、屋内空間では、女性高齢者の滞在が多くみられた。このように、男女によって滞在している場所が異なり、性別が居場所の形成に影響を与えることを指摘した。また、野球、グラウンドゴルフ、テニス、囲碁、子ども達の遊ぶ姿等のアクティビティが常にある地区の屋外空間には、そのアクティビティに直接関わっている人ではなくても、そこに滞在する高齢者の様子もみられ、他の場所に比べ人々の滞在が多くみられた。これにより、一つの空間に多様なアクティビティが出来る場所を集中させることにより、人々がよく集まるようになり、また、その集まりにより高齢者が自宅から出てくる一つの要因につながる可能性もあることを指摘した。

4章では、アンケート調査から得られた回答者の余暇活動の内容および各団地におかれている空間の利用有無に焦点を当て、性別、年齢、家族構成、居住年数の違いによる余暇

活動の有無と各空間の利用有無とその関連性を明らかにした。関連性が多く見られたのは、回答者の性別と年齢の違いである。

ジェンダーによる余暇活動内容や各場所での利用有無との関連性が明らかになったことから、男女の性向に合わせた場所づくりが求められ、特に、退職後、自分の居場所の喪失が大きく、あまり地域社会とつながりを持っていなかった団塊世代の男性らが自分の居場所を確保できる環境づくりや整備が必要であるなど、年齢層（前期高齢者・後期高齢者）に適したプログラムの構成をするなどの運営側面の配慮が必要であるとした。

5章では、各団地に暮らす一人ひとりの高齢者の多様な居場所に着目し、その場所がどのような空間的な要件によって居場所として成り立っているかの考察を行った。それぞれのライフスタイルを持っている多くの高齢者が、地域で各自の居場所が確保できる多様な居住環境を実現するための知見を得るため、インタビュー調査の、各団地の屋内・外空間で「気軽によく訪れる場所（週1回以上）」、「自分らしくいられる好きな場所」＝（居場所）のコメントから、居場所として成り立つ空間的な要件を明らかにした。また、アンケート調査とインタビュー調査の「各場所を利用しない理由」の項目から、その場所が居場所として成立しない要因についても考察した。

6章では、本論文の総括と今後の課題について述べた。

多くの高齢者が自宅外で自分の居場所が確保でき、社会とつながりをもつためには、多様な居場所のある居住環境への配慮が必要である。特に、団塊世代の男性高齢者の居場所づくりの必要性和、各集合住宅団地の居住者のライフスタイルの違いによる居場所の計画、消極的な高齢者のための居住環境、子どもの存在の重要性、団地内の思い出の場所（記憶の蓄積）への配慮が今後の課題として重要になるとした。

以上のように本論文は、集合住宅団地に暮らす個々の高齢者の居場所の多様性と成立要件を明らかにし、外出し社会とつながりを持つことができるための高齢者の居場所のあり方と可能性を示した。

今後の集合住宅の計画、高齢者のための空間計画に重要な知見を与えるもので、建築計画学の発展に大いなる寄与となりうるものである。

よって本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。